

# 巻頭言

2006.12月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 父の時代そして子供の時代

茗溪塾塾長 宇野雅春

「硫黄島からの手紙」という映画を見ました。アメリカのクリント・イーストウッドという監督が、日本人の視点から硫黄島玉砕をとらえた、第2次世界大戦末期を題材にした映画です。「硫黄島2部作」としてアメリカ側からとらえた「父親達の星条旗」がすでに公開されていたので記憶にある人もいるかと思います。5日間くらいで降伏すると思われた日本側の36日間に及ぶ徹底抗戦がリアルに描かれています。負けがわかった段階で自決するという当時の日本兵のあり方もあって、万に一つも生きて帰れない状況下、徹底的に抗戦していく栗林中将（渡辺謙）や妻子を内地に残し嫌々従軍している「パン屋」（二宮和也）が中心に物語は進んでいきます。私がこの映画に大きく感動した理由には、私の父が職業軍人としてこの戦争に参加していたということがあからずです。亡くなって20年もしてから、叔母の葬式で叔父の一人に、父が「学徒動員」で「陸士」にいったことを知りました。「学徒動員」ということは歴史の教科書の中にしか存在しなかったのだからちょっとびっくりしました。その時、はじめて、父が出征したのは、20歳を過ぎたばかりのことと思ひあたりました。生きている間中もきちんと戦争の話をしたことがなかったのと、軍人のような厳しさもあるとはいえず煩悩で酒好きの印象の父でした。中央大学の法学部を学徒動員で中退した父が戦後に選んだ仕事は「建設業」でした。いま思えば、焼け野原の荒れ果てた日本の国で戦後この仕事がかもとも飛びつきやすい仕事だったのかもしれません。その後何度かの不況があり、会社もうまくいってばかりではありませんでした。

兄と冗談に「戦争責任を取っている」とうなずき合ったほどに父の戦後の生き様は苦難の連続だったように思います。最後は「認知症」を患った母の介護で倒れ、誰にも看取られることもなく突然の死を迎えました。

「硫黄島からの手紙」を見ていて、「日本にいる妻子 兄弟 父母」を守るためにさまざまに徹底抗戦をするという建前に感動したというのではなく、生きること＝戦い抜くこと、万に一つでも可能性を棄てずにやり抜くところでしか未来はないと考え実行する栗林中将の悲壮な覚悟に圧倒的に心を揺さぶられたということなのです。

そして、61年が過ぎた今、子供達が「生きること」を安易に放棄してしまう時代にきているということがひどく残念に思えるのです。次の時代の子供達の幸せのために払われたはずの「犠牲」が踏みにじられていく気がします。「父の時代」をきちんと受け止められなかった私達が今度は「子供の時代」を受け止めきれずに右往左往している気がしてなりません。父が戦争を語らなかつたのは、多分その渦中にいていやなことかたくさんあったからではないかと思えます。肩を組んで軍歌を歌うなんて姿は一度も見たことはありませんし、かといって戦争批判をしていたわけでもありません。本当に戦争を経験してしまつたら、懐かしく語ったりはしないということだったかもしれないし、生きていくこと、子供を育てること、それだけで精一杯だったかもしれません。

映画は、負傷しながらも奇跡的に生き残ったパン屋の姿をとらえて終わります。戦後どんな風にもその人が生きてかかを考えるとふと町をあるいているお年寄りの事が頭に浮かびます。そしてその時子供だったり赤ん坊だったり又は生まれていなかった「私達」の世代のそのまた子供達が時代を担う頃となってきています。

日本という国のかかってない繁栄の中で子供の時代が「死ぬ時代」ではなく「生きる時代」でありますようにと、祈る思いです。